# 宇宙〈そら〉のうた

井上 珠月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宇宙〈そら〉のうた

【Ｎコード】
Ｎ１５８７Ｙ

【作者名】
井上　珠月

【あらすじ】
地球が滅びてから三百年後。宇宙の星々はマクシミリアンと名付けた謎の宇宙生物の脅威に晒されていた。人類は生き残るためにグレイドと呼ばれる戦闘ロボットを開発してマクシミリアンと戦っていた。ガリア星からの帰りに、そこに四百年以上眠っていた地球人が発見され…。

# プロローグ（前書き）

小説家になろうでは初投稿です。稚拙な文章力ですが、よろしくお願いします。不定期更新になると思います。

# プロローグ

――地球はもう終わる。

薄れゆく意識の中で血だらけの男は最後の力を振り絞り、目の前のスイッチに手をかけた。

目の前には、百年以上も前から眠ったままの少女の映像が映し出されていた。

幸せそうに眠る少女は美しく見え男は安らぎを覚える。

祖先から託された少女だった。

彼女は彼の持てるすべての技術を詰め込んだ生命維持のための水膜に覆われたカプセルの中に入っている。

地球が謎の宇宙生物の侵略を受け始めてからもうすでに百年以上の時が経っていた。

――シオンの歌をもう一度聞きたいな。

それが、彼女を護り続けてきた曾祖父の最後の言葉だった。

彼は彼女のことはまったく知らないが、曾祖父が彼女に惚れ込んでいたことだけは知っていた。

だから、彼は曾祖父の意思を継ぎ彼女を目覚めさせるために尽力してきた。

古いディスクから流れる彼女の歌声は曾祖父が聴きたがる訳がわかるほど心に響いた。

時に力強く、時に優しく、彼だけでなく聴くものは魅了される。

彼自身、彼女が目覚めた時は精一杯面倒を見ようと思っていた。

そして、曾祖父が聴きたがっていた彼女の歌を生で聞きたかった。

しかし、それができないことは明白であった。

地球はもう滅びる。

そして、自分の生命ももう終わってしまう。

彼は最後の力を振り絞り彼の最高傑作でもある地球初、いや人類初であろうグレイドを宇宙に放つことを決めた。

曾祖父の想い人であり、自分の初恋でもある彼女を護るために。

地球を護るためには間に合わなかったが、彼女のことは護れるだろう。

彼がスイッチを押した途端に、宇宙に向かってカプセルは放たれたのだった。

――どうか、神よ。彼女が目覚めたときに世界は優しく明るいものでありますように。

神に祈ったことのない男の涙ながらの最後の願いだった。

次の瞬間、地球は大爆発を起こして消滅した。

宇宙生物のせいか、それに対抗しようとした人類の反撃の核兵器の為だったのかはわからない。

とにかく、地球は跡形もなく吹き飛んでしまった。

宇宙に投げ出されたカプセルは、誰の目にも触れることなく宇宙をさ迷っていた。

彼女が眠り始めてから、すでに百年以上は経過している。

地球消滅の話はすぐに宇宙の各惑星に伝わり、未確認生物から惑星を護るためにグレイドの実用化が勧められることとなった。

だが、地球でグレイドがひっそりと開発されていたことを知るものは誰もいなかった。

地球から放たれたカプセルが発見されることはまだずっと先のことであった。

# 眠れる美少女

『艦長、ガリア人の乗ったカプセルを回収、今よりレジェンドに帰艦します』

通信モニターに映る映像にアリアクロス星最大の人工都市エターナルに付随している戦艦レジェンドの艦長はため息を小さくついた。

今年に入り、ガルド星からの脱走者や難民が増えている。

「……レジェンドは難民救出船ではないのだがな」

「……言いにくいのですが、前方１０００フィードの場所に生命反応確認しました。小型のカプセル型飛行物体と思われます」

「…通信せよ」

「何度も通信を申し入れているのですが応答はありません」

「…偵察隊を出すか」

通信に答えないとなると厄介な相手の可能性もある。

現在、母星であるアリアクロス星はマクシミリアンと名付けた宇宙生物体から攻撃を受けている。

名高い惑星が次々とマクシミリアンの脅威にさらされていた。

各星々は対抗措置のため技術の提供をしあい、マクシミリアンに対

抗すべくグレイドと呼ばれる人間の乗る戦闘用のロボットを開発した。

アリアクロスは膨大な資源と高い技術力のお陰でグレイドをいち早く実用化でき他星にも多く提供していた。

しかし、グレイドを実用化できない星は次々と滅亡の一途を辿っている。

現に３００年前、最も美しい惑星と謳われた地球の消滅もグレイドがなかった為といわれている。

地球人の多くは他星に移住していたが、地球と運命を共にした者も少なくなかった。

今、まさにガリア星も地球と同じ道を辿っている。

したがって難民が増えるのは無理はないが、あいにく敵はマクシミリアンだけではなかった。

グレイドを否定する人々も存在しいち早くグレイドを完成させたアリアクロスに反感を抱いているものも多くいる。

マクシミリアンとの戦いにもさることながら、グレイドは星同士の戦いにも重宝される兵器になることは間違いないからだ。

ガリア人の中にもそういった思想が根付いており、マクシミリアンよりアクアクロスの方が厄介だと思っている人間もいる。

返答がないということは、そちらの線が強い。

艦長のゼルダは小さくため息をつくと保護したあとのことを考え、頭を悩ませる。

「…偵察隊を出す。攻撃してくるようなら撃って構わん」

苦渋の選択である。

クルーの表情が暗くなる。

マクシミリアンならともかく同じ人間ならば後味は悪い。

「…出れる者がいないなら私が行こう」

ゼルダはクルー達の表情を見て自らがグレイドを操縦すると言う。

人間を攻撃すれば責任を問われるだろう、いっそ、その責を自分が負った方がいい。

それが元グレイドのエースパイロットとしての責務だろう。

「…貴方を行かせられるわけないでしょ。俺が行きます」

艦の最高責任者を行かせるわけにもいかず、グレイドパイロットの小隊長ハルが手を上げる。

ハル・ジェイドは１６歳の次代の優秀なエースパイロットである。

できることなら行かせたくはないが、他に適任者もいない。

「…危険が伴うが大丈夫か？」

「グレイドパイロットには常に危険が伴うものでしょう？」

苦笑し、ハルは言う。

「……よかろう。油断はするな」

ゼルダは表情を引き締めて言う。

「油断はしません。もし、マクシミリアンならばカプセルごと吹っ飛ばします」

ハルも神妙な面持ちで答え、ブリッジを出て、グレイドの置いてある格納庫に向かう。

「…艦長、カプセルを遠隔解析したのですが、どこの星の物かわかりません。マクシミリアンとも違うような気がします」

解析を行っていたオペレーターの言葉にゼルダは眉根を寄せる。

『準備出来ました。ハル・ジェイド、〈アルテミス〉出ます』

暫くして、グレイドに乗り込んだハルから通信が入る。

ハッチが開き、ハルの乗ったグレイドは宇宙に飛び出していく。

「ハル、出所不明のカプセルだ。危険と思ったら直ぐに帰艦せよ」

『了解』

ゼルダの言葉にハルは短く答え、カプセルに向かって行く。

十分ほどして、カプセルが見え、ハルは一瞬戸惑った。

今まで見たことがないタイプのカプセルだ。

グレイドを飛行型から人型に変型させるとハルは慎重にカプセルに近づいていく。

『目標を捕捉。接触します』

ハルは言うとカプセルを覗き込んであっと声をあげた。

「どうした? ハル、大丈夫か?」

ゼルダは声を上げたハルにすぐさま声をかける。

『すみません、大丈夫です。……カプセルの中には裸の女の子が乗っています。ただ、水のような膜の中に入っていて眠っているように見えます。どうしますか?』

ハルは見たままを報告する。

声を上げたのは水の中の少女が裸だったからだ。

『それと、初めて見るタイプのカプセルです。何か、文字が書いてありますけど……。俺には読めない文字です』

ハルは女の子から視線を移しカプセルを観察する。

一通りの惑星の文字は勉強したがそれはハルが見たことのない文字だった。

「……マクシミリアンでも難民でもないとしたら、一体何者だ？ハル、簡易検査を」

『…試みていますが測定不能。それに登録証もないみたいです』

カプセルを触りながらのハルの返答にゼルダはため息をついた。

「……危険はないと判断する。ハル、カプセルを回収し帰艦せよ。医療班は格納庫に待機。カプセルの中の少女の回復を。レイス博士はカプセルの分析を」

『了解。アルテミス帰還します』

ゼルダの言葉に周囲は慌ただしく動き始める。

ハルはカプセルの取っ手を掴むと抱き抱えるようにゆっくりと動き出し、戦艦レジェンドにゆっくりと向かっていく。

ハルは眠る少女から目が離せずにいた。

とても可愛らしいと思った。

しかし、首を振りすぐに気を引き締める。

何者かわからない以上、敵の可能性もあるからだ。

彼自身、家族や何人もの仲間をマクシミリアンに奪われている。

敵ならば、然るべき処置をとらなければもっと多くの仲間を失いかねない。

敵でなければいい。

そう思い、ハルは眠れる少女を一瞬だけ見て笑うと、レジェンドに向かっていく。

このカプセルと少女が後に大きな変革をもたらすことを、今は誰も知る由はなかった。

# 目覚めた少女

「……あのー」

オペレーターの一人、エミリアがおずおずと手を上げた。

「…カプセルの文字ですが、地球のものと思われます」

「……地球？ばかな。地球はもう３００年前に滅びている」

エミリアの言葉にゼルダはあり得ないと首を振る。

「『はやくおきておまえのうたをきかせてくれ』『しあわせになれよ、しおん』あとも同じようなことが別々の筆跡で書かれているようです」

エミリアはハルから送られた映像の文字を読み上げる。

「…でもこれ、日本語です。おかしいですね。日本は４００年前に海に沈んだはずですけど」

エミリアは言いながら首を傾げる。

「…とにかく、今は回収が先だ。エミリア、君にはカプセルの他の文字も読んでもらうことになるだろう。すまないが格納庫に待機していてくれ」

「はい」

エミリアは返事し立ち上がると格納庫に向かうため、ブリッジを出ていく。

「…今日は拾い物が多いですね」

副官のルミエールがゼルダに声をかける。

「…ああ。難民はともかく、正体不明の少女か。暫くは監視対象になるな」

「……裸の女の子の監視か。かなりの役得ですね」

「…服は着せろ、服は」

ルミエールの冗談を軽く流し、ゼルダは手元のモニターを見る。

「地球製のカプセルだとしても見たことがないものだな」

「……マクシミリアンではないようですね」

ルミエールもモニターを覗き込んで言う。

「…しかし、仮に地球人だとしたら自由はなくなるだろうな」

ゼルダは同情するような表情をしカプセルの中の少女の顔を見る。

眠れる少女は幸せそうに見えた。

「おや、裸の美少女をそんなに凝視しないでくださいよ。娘さんに怒られますよ」

「……」

ゼルダはその言葉に大袈裟にため息をついた。

「最近は口すら聞いてくれない」

ゼルダの発言にルミエールは笑いながら肩を叩く。

「…仕方ないですよ。奥さまとは離婚なされて新しいお父様もいらっしゃるんですから」

その言葉に更にゼルダは肩を落とす。

「…貴方はまだ若いしモテるんですから、新しい彼女でも作れば」

――ビービー

ルミエールの言葉を遮るように、非常警報が鳴り響き、一気にその場は緊張に包まれる。

冗談を言い合っていた艦長と副官はすぐに厳しい表情になり、緊急モニターに目をやる。

「前方２０００フィードにマクシミリアン確認。こちらに猛スピードで向かってきています。アルテミス帰還まで５００フィード、このままでは追い付かれる可能性があります」

「ハル、マクシミリアンが近付いている。加速ブーストは使えそうか？」

『このカプセルに耐久性があるかわかりません。このまま、マクシミリアンを迎撃します』

「……ハル・ジェイド、戻ってきなさい。空いてるパイロットは直ちに迎撃準備」

『俺ならだい』

「カプセルの少女を危険に晒すつもりですか？」

ルミエールの厳しい言葉にハルは何も言えなくなる。

『……了解しました。ブーストは使いませんが急いで帰還します』

ハルは小さく言いながら、スピードをあげる。

『アスカ・エミル、グレイド〈ゼウス〉迎撃準備出来ました』

『カウス・エグセイ、グレイド〈アテナ〉同じく準備出来ました』

「…ハルとカプセルを頼むぞ」

『『はい！』』

艦長の言葉に二人は返事をし、彼らの乗ったグレイドは宇宙に飛び出していく。

「砲撃の準備を。軌道は右舷１８５。だ」

「…それではマクシミリアンから大分離れますが」

「マクシミリアンは必ずその位置に移動する」

ゼルダは自信ありげに言う。

「了解しました。エネルギー充填始めます」

「……元エースパイロットの勘というやつですか？」

「……そうかもな」

「マクシミリアンがアルテミスに追い付きました」

オペレーターの声に緊張が走る。

『うわっ』

「落ち着け、今、アスカとカウスが向かっている」

『違います。カプセルが発光して……』

急にハルの通信が途切れ、大きな咆哮がした。

ブリッジのクルー達は緊張の面持ちでモニターを見つめる。

『……グレイド？』

ハルの小さな呟きが聞こえる。

「ハル、何があったんです」

ルミエールが問いかける。

『……カプセルが急に発光して手元を離れ変形しました。グレイドのように見えます』

ハルは呆然としながら答える。

『ハル、大丈夫？って、何コレ？え？グレイド？』

『……アリアクロス製ではなさそうだな』

ハルと合流したアスカとカウスの通信も入ってきた。

彼らも驚きを隠せないようだ。

「映像を送ってくれ」

ゼルダが冷静に言う。

『え？送っているはずですけど、見えませんか？』

ハルは驚いたように言う。

「何者かの妨害電波のために映像が遮断されています」

オペレーターが手元を操作しながら言う。

「カプセルの自衛システムが作動している為と思われます」

オペレーターがモニターから目を離さずに報告する。

『…！…マクシミリアン確認、編隊を組んで迎撃します。未確認グレイドは我々に攻撃の意思も逃亡の気配もなさそうです』

ハルは混乱しそうな頭で、見たままの状況を説明する。

見たことのないグレイドのようなロボットは全く動かなかった。

操縦士である少女が眠っているのだから当たり前だ。

「……許可する。未確認グレイドがおかしな動きをするようなら直ちに撃ち落とせ」

『『『はい！』』』

ゼルダの言葉にパイロットたちは訓練通りの編隊を組むと、マクシミリアンに向かっていく。

その時だった、先程の咆哮が聞こえ未確認のグレイドが幾筋もの光を出したのは。

『『『！？』』』

グレイドパイロット達を避けるように光は進み、マクシミリアンに光は吸い込まれた。

――――ブォォ

マクシミリアンの断末魔の叫びが聞こえた。

一瞬だった。

マクシミリアンは跡形もなく消え去り残ったパイロットたちは呆然と謎のグレイドを見る。

『……何があったの？』

『わからん。ただ、あのグレイドがマクシミリアンを消し去ったことだけは確かだ』

『……何なんだよ、あれ？』

「…状況を説明しなさい」

ルミエールが通信をする。

『謎のグレイドが一瞬でマクシミリアンを消し去りました』

ハルはグレイドを見ながら答えるが頭が混乱していた。

少女は眠っていたのだ。

攻撃など出来るはずがない。

それならばグレイドが自主的に攻撃したと言うことになるが、今のグレイド技術はそこまでいってはいない。

『……うーん、うるさいなぁ。お兄ちゃん？あと5分寝かせてよ』

謎のグレイドから声が聞こえ、パイロットたちに緊張が走る。

聞こえた声は眠たげで、今起きたばかりという声だった。

『……まだ、夜じゃない。何なのよ……って、何じゃコリャ？え？アタシ、裸？はい？何？え？どこ？』

謎のグレイドから混乱したような声が聞こえる。

『……あ、夢か。そうよね。裸で寝るわけないし？夢に決まってるわ』

慌てた声だったのが、気の抜けたような声に変わり、パイロット達は対応に困りグレイドを呆然と見つめるしかなかった。

# 目覚めた少女2（前書き）

ストックが無くなるまでは毎日更新予定です。

# 目覚めた少女2

「……君は何者だ？」

誰も言葉を発しない中、ゼルダは謎のグレイドに向かって通信を試みた。

『ぎゃあ！何？誰？……ああ、そうか夢だもんね。急に声が聞こえてもおかしくないか』

少女の答えにゼルダは眉間にシワを寄せた。

「…夢ではないと思うのだが？君の登録籍と名前を教えてくれないか？」

『……何か、アタシの夢の中なのに偉そうな感じね。つーか、登録籍って何よ？』

夢の中だと思い込んでいるのか、少女は随分とくだけていた。

「……惑星国籍のことだ。それからもう一度言うが夢ではない」

『裸で宙に浮いてるのが夢じゃなかったら何なのよ。アタシは露出狂じゃないわよ？てか、惑星ってまたでかく出たわね。アンタは宇宙人か！』

会話にならない相手に、ゼルダは眉間をグリグリと指先で押さえ、次の言葉を考える。

「おやおや、随分面白いお嬢さんだ。我々からとってみれば君も宇宙人だが？」

ルミエールが笑いながら声をかける。

『…タコ足は生えてないわよ？一応、人類だし。しかし、長い夢ね？明晰夢ってやつかしら？』

「……うん、じゃあ、きっとそれだ。因みに我々もタコ足は生えていないよ。で、君の名前は？夢なら教えてくれてもいいだろ？」

ルミエールが更に続ける。

「…何か、さっきの人とは違って小賢しい感じがするわね。ああ、アタシってこんなファンタジーな夢を見るタイプだったのね」

少女は感慨に耽るように呟く。

「……名前を教えてくれたら服を着せてあげるけど？」

『……セクハラ親父かよ！まあ、服は着たいわね。夢の中でもこの貧乳を晒すのは痛すぎるわ。巨乳でも晒したくないけどさ。アタシの名前は東城シオン。惑星で言ったら地球の日本が国籍よ』

少女の答えにゼルダとルミエールは顔を見合わせる。

『おかしいわ。名前を言ったのに服が出てこないわね。夢なのに』

少女はブツブツ言っている。

「……そうだな、君の近くにグレイド隊が見えるだろう？彼らについてきてここに来てくれたらすぐに服をあげよう。何なら着させてあげるけど？」

笑いながらルミエールは言う。

『……うわぁ、キモいわ。アタシの夢の中にセクハラ親父がいる。って、グレイド？……何、あれ、ガン〇ム？いつの間にかＳＦチックになってるわね』

「……セクハラ親父か」

ゼルダは思わず噴き出した。

ルミエールにそんなことを言える人間はそうはいない。

「……あ、着替えさせるのは私じゃなくて艦長の方ですから」

『艦長……何か、ムッツリって言うイメージよね。格好つけてるけど実際は妻とも子供とも上手くいっていなくてどうにもならないダメ男的な？居るのよねー、仕事一筋で家族の中で浮いちゃう人ってさ』

「ぶはっ」

今度はルミエールが噴き出した。

「……とにかく、グレイドについてレジェンドまで来なさい」

ゼルダは微妙な顔で咳払いをし、少女に声をかける。

クルー達は笑いを堪えているのか肩を震わせていた。

『ついてこいって、どうやって動かすのよ？裸で宙に浮いてんのに……。あ、夢だから念力か。って念力が使えないわよ？』

「ハル、アスカ、カウス。お嬢さんをエスコートしてあげて」

ルミエールがパイロット達に指示する。

『『『はい』』』

『やっぱり……ガ〇ダムみたいよね？やっぱり核燃料か何かで動いているわけ？夢ってスゲーな』

「……地球では核燃料でグレイドを動かすのか？」

驚いたようにゼルダは言う。

『……さあ？アニメの中ではそんなロボットが存在するけど？アタシはそんなにアニメは見ないからよくわからないわ』

「……アニメ？」

「…地球の文化の一つです。アリアクロスでも子供向けのアニメを移住者が作っています」

オペレーターが口に出す。

『…リアルな上に長い夢よね。早く目が覚めないかしら』

会話に飽きてきたのか少女が現実的な呟きを洩らす。

『……夢じゃない』

言いにくそうにハルは言い、謎のグレイドの後方に立つ。

アスカとカウスは言葉を発さずに謎のグレイドの両脇を固める。

『…夢じゃなかったら何なのよ？アタシが露出狂ってことなの？』

『……未確認グレイドを確保、今よりレジェンドに帰還します。ブースト許可を』

「……許可する」

少女の問いにハルもゼルダも答えずに短い会話がなされる。

眠っていた少女はとても可愛らしかったが、口を開けばかなり異質な感じがした。

喋らなければ美少女だ。

ハルは、少しばかりその少女にときめいてしまった自分を恥じていた。

「ブースト充填まで三十秒。カウントダウンをお願いします」

『……何？ブースト？』

『…黙って？何かにしがみついていて。怪我をするわよ』

アスカが少女に声をかける。

『……いや、まったく動けないんだけど？』

『…ホールド装置を作動させろ』

カウスが慌てて少女に言う。

『……なにそれ？よく分かんないんだけど？』

『…強制ホールド装置を作動。カウントダウン開始、１５、１４、１３、１２、１１、１０、９、８、７、６、５、４、３、２、１。発射』

ハルは言いながら緊急ホールドの光線を少女に向かって放つ。

――――ゴォァ

『……なに？のわぁぁぁ』

急激なスピードの中、謎の少女のシオンの変わった絶叫だけがこだましていた。

幸いと言うべきか、ハルのホールド装置は効いているようで、少女が急激な加速でカプセル内で打ち付けられるようなことはなかったが、彼女にとって衝撃的な出来事であったことは間違いなかった。

# 艦長と副官（前書き）

読んでくださってありがとうございます。

## 艦長と副官

「……やれやれ、かなり面倒な拾い物をしてしまいましたね？ムッツリ艦長？」

「そうだな、セクハラ親父。どうする？」

「……取り合えず、服を着させればいいんじゃないんですか？」

ルミエールは困ったように笑いながら言う。

ゼルダも大きくため息をつく。

「…まずは、現実だと認識をさせるべきだろうな」

いつの間にか来たのか、レイス博士が進言する。

「…おや、やはり彼女は研究対象ですか？」

「中々、面白い。知らないとは言えアリアクロスの最高位の軍人をボロカスに言えるのだからな」

「……そっちですか」

「それに地球にグレイドが存在したとは知らなかった。しかも、かなり高度な技術と言える、開発者に興味がある」

「…あのお嬢さんには？」

「……ふむ、何故にグレイドに乗っていたのかは気になるな。そして、夢だと思い込むまでの判断の速さが素晴らしい。現実を突きつけたときの反応が楽しみだ」

レイス博士は腕組みをしながら言う。

「……鬼畜博士とか呼ばれそうですね」

ルミエールは苦笑する。

「鬼畜眼鏡だと思います」

オペレーターが訂正するように冷たい視線でレイスを見ながら発言する。

「……誉め言葉だと受け取っておこう」

肩を竦めてレイスはブリッジを後にし、格納庫に向かう。

彼は端から見てもわかるほど楽しげだった。

「……いいんですか？あの女の子レイス博士なんかに預けたら発狂しちゃいますよ？」

鬼畜眼鏡と発言したオペレーターのアイは上司の二人を見る。

彼女はレイス博士に発狂させられかけた被害者でもあった。

「…大丈夫だ。レイス博士は研究対象を壊したことはない」

「そうそう。ああ見えて、外面はかなりいいですから爽やかに接するんじゃないですか？」

「……艦長と副官も鬼畜をつけられますよ。あの男は本当に最悪です。私はあの女の子が心配でたまりません」

アイは非難がましい目で二人を見ると、ため息をつきながら、シオンと名乗った少女の服を用意するためにブリッジを出ていく。

「……さて、じゃあ、鬼畜な我々も眠り姫の観察にでも行きましょうか？」

ルミエールに促され、ゼルダもため息をつき席を立つ。

どうも気が重い。

どのようにあの変わった少女と接すればいいのか皆目見当がつかなかった。

眠っているときは、本当に可愛らしい少女だと思ったのだが喋ったら随分と印象が変わった。

普通に会話が出来るのかも疑問である。

それに謎のグレイドに乗っていたのだ。

地球人だと言うが、とうに地球は滅びている。

敵ではないと本能は告げているのだが、立場上厳しい対応が求められるだろう。

それに、詳細を本星であるアリアクロスに送らなければならない。
頭が痛くなるばかりだ。
副官のルミエールにも気付かれないように、小さくゼルダはため息をつくのだった。
パイロットの時は、ただ敵を殲滅すれば良かったのだが艦長となればそうはいかない。
自分の至らない点は副官であるルミエールがカバーしてくれるが、重要な決断は己が決めなければならない。
「……ゼルダ、大丈夫ですよ。貴方の勘は当たる。彼女は敵ではないのでしょう？」
前を行くルミエールは振り返らずに親友でもあるゼルダに言う。
「……ああ。だが、彼女は政治や戦いに嫌でも巻き込まれるだろうな」
「……かつての私たちのようにですか？」
立ち止まるとルミエールは親友を振り返り顔を見る。
「……俺は、お前を巻き込んでしまったことを後悔している」
その言葉にルミエールは表情を変え、ゼルダの襟首を掴んで壁に押し付ける。

「……ふざけんな。後悔しているだと？俺はあの時のお前の判断が間違っていたとは思っていない。だから、ここにいる。何度言わせるんだ？次、そんなことを言えば二度と娘と会わさんぞ？」

普段の温厚な面影はなく、本気でルミエールは怒っていた。

「……悪かった。娘に会えなくなるのは困る」

ゼルダは苦笑し、肩を竦める。

何度この事でルミエールを怒らせたことだろう。

「……私は後悔はしていない。だから、二度と口にしないでください」

ルミエールの囁くような言葉に、ゼルダは頷く。

「……ところで、いつまでこの状態なんだ？」

いつもならすぐに離れるルミエールがいつまでも離さないので、ゼルダは言葉に出す。

「……いいじゃないですか。私とあなたの仲でしょ？」

怒りを鎮め、イタズラっぽく笑うルミエールにゼルダは顔を引きつらせた。

目の端に、服を持ったアイが見える。

悪いと思っているのか視線がこちらに向くことはないが、チラチラと様子を窺っている。

これでは、まるでルミエールに迫られているようだ。

ルミエールは何度も同じことを言わせるゼルダに罰を与えるため、アイがいることを知っていて離れなかったのだと気付いた。

オペレーター達の間では艦長の離婚の理由は男に走ったためだと噂されている。

無論、そんな事実はないが今回のこれで更にその噂が加速するであろうことは間違いない。

「……本当に娘に会えなくなったら、呪うぞ」

ゼルダは恨めしげな顔をし、本気で言っていた。

「……じゃあ、責任を持って貴方を幸せにしてあげますよ。でも、男同士の恋愛なんてしたことないからわかりませんけどね」

「……やめてくれ。どうせなら、女に迫られた方がいい」

ゼルダは疲れたように言い、ルミエールの手を払い除けると格納庫に歩を進める。

「……さっきの話ですけど、貴方は何でも一人で背負いすぎです。私は本当に後悔なんてしていませんよ。むしろ、貴方を誇りに思っている。あの女の子も我々が護ってあげればいいと思いますよ」

後ろからの親友の言葉にゼルダは小さく笑う。

「……そうだな。鬼畜なムッツリ艦長とセクハラ親父の言うことをちゃんと聞ける娘ならいいがな」

「……私だったら、そんな人たちの言うことは聞きたくないです」

「……俺もだ」

答え、ゼルダは笑う。

少しだが、気は楽になった。

昔から変わらない親友とのやり取りであった。

未確認グレイドと謎の少女の保護が吉と出るか凶と出るかは今はわからないが、アリアクロス星に生きる者にとって最善の選択をせねばならないことだけは確かだ。

格納庫に向かうゼルダの表情は引き締まり、最高位と呼ばれる軍人のそれだった。

# もしも（前書き）

サブタイトルを名付けるのは、難しいですね。

**もしも**

『……ねぇ、貴女、大丈夫？』

アスカはすっかり大人しくなってしまったシオンに声をかける。

『……何か、乗ったことないけどリニアみたいなものかしら。ちょっと頭がふらふらするわ』

シオンは律儀に答える。

『…今から、戦艦レジェンドに帰艦する。怪しい動きをすれば直ぐに拘束する』

ハルがシオンに言う。

『素っ裸で怪しい動きをするってアタシは変態か！つーか、すでに拘束されてますよね？明らかに逃げれねぇよね？この状態！』

『……変な奴だな。何なんだよ、お前は？』

カウスが呆れたように言う。

『は？アタシはアタシよ。アタシ以外の何者でもないわ。本当にリアルな夢ね、現実みたい』

シオンは基本的に言われたことには返事をするようだ。

ただ、答えになっているかと言えばかなり微妙だ。

少女の返答にパイロット達は困惑していた。

シオンと名乗った謎の少女は本気で夢だと思い込んでいるようだからだ。

『……ねぇ？もし、夢じゃなくて本当に現実だとしたら貴女はどうするの？』

アスカはムクムクと沸いた好奇心に耐えられずにシオンに聞く。

『……そうね。とりあえず、何で裸なのかを考えるわ。誰に脱がされたとか何人に裸を見られたとか？いや、それより、ここはどこなのか？とか、うーん、わかんないな』

シオンは考えるように答える。

『……随分、裸にこだわるのね』

アスカは苦笑して言う。

『だってさ、知らない内に裸になってるって嫌じゃない？貴女はまったく知らない人間に裸を見られて平気なわけ？』

逆に聞かれ、アスカは戸惑う。

『…確かに嫌よね。私も耐えられないかも』

『でしょー？夢じゃなかったら悶死しそうだわ』

アスカはシオンの言葉に何も答えられなかった。
これは夢などではなく、間違いなく現実なのだから。

『……とにかく、中に入る』

ハルは二人の会話を遮るように小さく言うと、アスカとカウスを促して開いたハッチから艦の中に入っていく。
グレイド四体を収艦すると、ハッチは閉じる。

『……うわっ』

シオンの小さな叫び声が上がり、ドスンと音が聞こえた。

『……いったー。しかも何か濡れてるし…どうなってんのよ?』

どうやら無重力状態だったカプセルは艦に入ったために重力を元に戻したようだった。

――♪♪♪

落ちた時にどこかに触ったのだろう、カプセルから音楽が聞こえ始めてきた。

『……げ、ちょっと、止めてよ。アタシの歌じゃん!』

シオンは慌てたように言うが、パイロット達に止める術はない。
ただ、流れる音楽と歌声は美しく聞き惚れてしまう。

――この空に届け、僕らの想い。

――いつか夢の続きを探しに行くから

――♪♪

『何なのよ?何で、夢の中でアタシの歌が流れるのよ!』

シオンは真っ赤になり頭を抱えて顔を隠してしまっていた。

だから、ハッチを進んだ先の格納庫に大勢の人間がいることには全く気付いていなかった。

彼女が大勢の人間に裸を見られていることに気付き絶叫するのはもう少し先のことだった。

## 夢ではない現実（前書き）

読んでくださりありがとうございます。サブタイトルはその内、変えようと思っています。

## 夢ではない現実

「……落ち着きました？」

アイは絶叫し終え、暫く呆然としていたシオンに声をかける。

「……普通、この絶叫で目が覚めて、夢かーってなるわよね」

シオンは声をかけてきたアイを見ながら疲れたように言う。

「何で覚めずに、美人なお姉さんに話しかけられているのよ。どうなっちまってるのよ」

未だに夢だと思っているシオンは頭を抱えたまま、特に裸を隠そうとはしなかった。

周りの男性達は見てはいけないと言うように、シオンから目を逸らしていく。

「……とりあえず、服を着させてあげましょうか？」

笑いながらルミエールはシオンに話しかける。

「……その声はセクハラ親父ね」

シオンは目だけ動かしてルミエールを見る。

親父と呼ぶにはまだ若いような気もする。

だが、今さら親父を消すのもなんなのでシオンはあえて訂正はしなかった。

「……まだ引っ張りますか。私はまだ親父と呼ばれる年齢じゃありませんし、せめてセクハラお兄さんがいいですね」

ルミエールは苦笑し、自分の軍服の上着を脱いでシオンにかける。

「……ねぇ、この歌を止めたいんだけどどうすればいいの？セクハラ親父」

シオンは不機嫌そうに聞く。

お兄さんと訂正する気はまったくなさそうだ。

「…とても素敵ないい歌だと思いますけど？」

「……駄目よ。この歌は失敗作なの。何で、この歌が流れてるかわからない。最悪よ、夢は覚めないし貧乳は晒されるし、何か濡れてるからケツは冷たいし」

シオンは口を尖らせて言う。

「……残念ながらこの夢が覚めることはないだろうな」

ゼルダがシオンを見ながら言う。

「……ムッツリ艦長め。アタシの夢は覚めないって？アタシ、明日はライブがあるんだから覚めないと困るの……よ？」

言い終わり、シオンは不思議そうに首を傾げた。
朧気な記憶だが、ライブ会場に向かっていた自分がいた。
「……お嬢さん、申し訳ないけど君を検査したいのだけど?」
爽やかな笑顔をシオンに投げかけながらレイスが言葉を発する。
「……嫌よ。アンタは絶対に腹黒な鬼畜眼鏡男よ。アタシの勘がそう言っている。爽やかそうに見せて後から人を地獄に叩き落とすタイプだわ!」
何の根拠があるのかはわからないが、シオンはレイス博士を見てビシッと指を指し言い放った。
シオンの言葉に何故かどよめきが起きた。
レイスの表情がスーッと変わり、周りの人間は固まった。
「……中々、人を見る目がある。優しく接しようかとも思ったがその必要はないな。鬼畜らしく地獄に叩き落としてやろう。これは現実だ。東城シオンよ、本当は気付いているのだろう?」
冷たい表情で言い放つレイスの言葉にシオンは嫌な顔をする。
「…いきなりラスボスですか?無理だわ、勝てる気がしない」
シオンは言うと、自分の右側の頬を右手で思いっきり叩いてみる。

――パァン

シオンの行動に周りの人間は驚いた。

腕を振り上げたせいで、シオンにかけてあったルミエールの上着はパサリと脱げたが誰も彼女から目が離せなかった。

レイス博士ですら驚いたようで、目を見開いていた。

これまでの会話から何故このような行動に出たのか全く理解できない。

「……覚めない」

呟くと、シオンは左側の頬を左手でもう一度叩いた。

――パァン

周りは呆気にとられてシオンを見ていた。

「……痛い。本当に……夢じゃない…の？」

シオンは赤くなった両頬を押さえて呆然と呟く。

「……現実と認めたということでいいのか？」

ゼルダは脱げた軍服をもう一度シオンにかけ直して問う。

「……認めたくないわよ。だけど、明らかに夢じゃないリアル感があるのよ。ほっぺが超痛いし。でも、アタシ、何でこんなところ

に素っ裸でいるのか、わからないわ」

シオンは遠い目をしながら言う。

「……とりあえず、健康診断をして。……精神や身体に異常がないかを調べて、着替えてもらってから詳しい話を聞かせていただきましょうか…ね？」

ルミエールが微妙な顔でシオンに言う。

シオンの行動は到底理解できないものだった。

「……頭なら正常だから」

シオンはため息混じりに言う。

周りの人間の目は、信じられないモノを見ている目だった。

どう考えても頭を心配されているのだろう。

「……意外だな。もっと、取り乱すかと思ったが…。頭の悪そうな言動の割には酷いわけではなさそうだな」

レイス博士が少女をマジマジと見つめて言う。

周りの人間はレイスの言葉にギョッとした。

「……レイス博士が、他人を褒めてる」

アイが真っ青になり、驚いたように小さく呟く。

シオンはポカンとする。

レイス博士とやらの発言のどこに褒めてる言葉があったか。

どう考えても超バカではないバカだと言われている。

「……アイ、君は一体、僕を何だと思っているんだ？」

薄ら笑いを浮かべたレイス博士に見つめられ、アイは更に真っ青になる。

「……レイス博士、アイさんを虐めるのはやめてください。それより、東城さんに色々聞いた方がいいんじゃないですか？」

カウスが脱線しそうな空気を元に戻そうと声をかける。

「……名字で、しかもさん付けで呼ばれるのって、何か新鮮ね」

シオンが感動したように言う。

「……名字？」

カウスは首を傾げる。

「日本では確か、家名が先にくるのでしたね？アリアクロス風に言えば、シオン・トウジョウになります」

エミリアがシオンに笑いかけながら説明をする。

「……こっちのお姉さんも綺麗だわね。やっぱり、ムッツリ艦長が顔で選んでるってことかしら」

シオンはポーッと頬を赤らめて、エミリアを見て言う。

「……いい加減、話を元に戻しませんか？」

ハルが呆れたように言う。

いつまで経っても話が進まない。

彼はいつになく苛ついていた。

「…アンタ、カルシウム不足？そんなにイライラしてると、禿げるわよ？」

シオンは心配そうに言うが、自分が苛つかせていることには気付いていなかった。

「……何なんだよ、お前！ふざけたことばっかり言いやがって！」

ハルはとうとう大声を出し、シオンを怒鳴り付けた。

「はあ？ふざけてなんかいないわよ！アタシがアンタに何したっていうのよ？アンタみたいな八つ当たり野郎は無惨に前方後円墳風に禿げ散らかすがいいわ！」

シオンはムッとして怒鳴り返す。

「……なんだと？」

ハルはシオンを睨む。

「……いい加減にしなさい。ハル・ジェイド。何を苛ついているのです、君らしくもない。本当に禿げますよ？それと、シオン・トウジョウ。君は黙っていなさい」

ルミエールが厳しい言い方で仲裁に入る。

「ハル、落ち着け。この娘はまだ状況がわかっていないのだ。それから君もだ。もう少し冷静になりなさい」

ゼルダは宥めるようにハルとシオンに言う。

「……すみません」

ハルは上司達に頭を下げる。

「……」

シオンはムッとしたまま何も言わず、プイッと横を向く。

現実だと言っても、実感はわかない。

わからないことだらけだ。

ハルほどではないが、訳のわからない状況にシオンも苛つき始めているようだった。

## 夢ではない現実2（前書き）

読んでくださりありがとうございます。次回からは不定期更新になります。

## 夢ではない現実2

「……シオン、君にいくつか聞きたいことがある」

レイス博士はシオンに言うが、シオンは何も言わず、黙っていた。

「…副官、どうやらお前の発言が機嫌を損ねてしまったようだ」

レイスはルミエールを見る。

「……もう喋ってもいいですよ?怒ってすみませんでした」

ルミエールはシオンに謝るが、シオンは横を向いたままだ。

「…今度は黙りか。地球人と言うのはそういう面倒な種族なのか」

レイスはため息をつく。

「…こいつだけだと思いますが」

ハルは言う。

彼は移住してきた地球人の血を引いている。

シオンが地球人の代表のように言われるのは、彼としては納得がいかない。

「…シオン、別に答えないのは構わないが答えぬのなら君の記憶を勝手に見させてもらうが」

レイス博士は言うが、シオンは表情一つ変えはしなかった。
先程までとはまるで別人のような印象だ。

「…勝手にすれば？」

シオンは無表情のまま言う。
その返答にレイスは眉間にシワを寄せる。

「…それをしたくないから君に質問をしている。僕の気が変わらない内に答えることだ」

「あら、鬼畜眼鏡がそんな風に言うなんてよっぽど危ないことのようね？…アタシ的には別にどうなったって構わないわよ？」

シオンは挑発するように、レイス博士に向き直って言う。

「……艦長、こう言っているがどうする？構わないか？」

レイスはゼルダに聞く。
人の記憶を勝手に見ることは可能だが、それをすると殆どの人間は発狂してしまう。
元よりこの少女シオンを廃人にする気などはない。

「シオン、素直に答えてくれたら君の欲しいもの…勿論、可能な物ならば…だが、与えよう」

ため息混じりにゼルダが言う。

レイスがまさか手こずるとは思ってもいなかった。

大概の人間は彼の言葉に素直に答えてくれる。

だが、シオンは違った。

それならば、物で釣るしかないだろう。

「……何も要らないからアタシを地球に帰してよ。帰してくれるなら何でも話すわ」

シオンの言葉にゼルダの胸中は狼狽していた。

欲しいものの要求はまさに不可能なものだ。

地球が滅びたなどと言ったら、一体どうなるのか。

彼は副官を見る、ルミエールは胸に左手を当てていた。

これは彼が困っている時の癖だ。

ゼルダは一つため息をつき、シオンを見る。

「すまないが、それはできない。隠してもいずれわかることだから先に言うが、地球は三百年前に滅びた。もう存在しない」

ゼルダは表情を変えずに言う。

「……そう」

シオンは意外なほど冷静だった。

予想外の反応に、その場は静まり返っていた。

「……信じるのか？」

レイス博士が聞く。

「…泣き叫んで嘘をつくなとか、ショックで気絶した方がいい？やれっつーならやるけど？」

シオンは自嘲気味に言う。

「……何でそんなに冷静なんですか？」

ルミエールが聞く。

シオンはカプセルの文字を指す。

「……ここに、２１１８年に書き直したって書いてある。アタシの覚えている最後の記憶は２０１５年。約百年後に書き直してるっておかしいでしょ？三百年前に地球が滅びたってことはアタシは冷凍保存かなんかされて生きていたってことなんでしょうよ」

どうやら横を向いた時にその文字が目に入ったために、シオンはずっと黙っていたようだ。

そして、それを確かめる為に地球に帰して欲しいと要求したのだろう。

シオンは彼らが思うよりずっと聡い娘に思えた。

「…それでは君の記憶の限りで構わないが質問をいくつかする。当時の生活や政治、世界情勢、文化、それからマクシミリアンの兆候などがあったか。それと、人間を冷凍保存とかいうその話は？」

「聞かせるほど政治なんて知らないし、世界情勢だってよく分からないわ。それにマクシミリアンって何？冷凍保存に関してだってうろ覚えだし。つーか、アタシが今の状況を知りたい。誰がアタシを脱がせたとか、裸の理由とか、アタシのこの歌を誰が録音したのかとかさ」

シオンは質問に答えながら最後に頭を抱えてしまう。

「……やっぱりそこなんだ」

アスカが小さく言う。

「何でよりによって真っ裸よ？何の罰ゲームよ！あの曲まで流れ始めるし……最悪だわ。畜生、誰だか知らんけど許せん」

シオンは半泣きになり、ブツブツ呟いている。

「……中々、図太い神経を持っているようだな」

レイス博士が呆れたように言う。

普通はもっと別のことを口にしそうなものだ。

友人や家族、シオンの口からはそれを心配する言葉などは出てきていない。

もういないと理解しても、まずは家族や友人の安否を気にするのがアリアクロス人だ。

シオンの考えは彼らには理解できないものだった。

「……最悪だな。家族や仲間のことが心配じゃないのかよ？」

ハルは軽蔑するような眼差しをシオンに送る。

「…最悪で結構よ。存在しない家族や友達を心配しろって？」

シオンは笑う。

「……悪いけど、アタシは感傷にひたるタイプじゃないわ」

シオンの言葉にハルが激昂しそうなのを察してか、カウスとアスカが二人の前に立ちはだかる。

「……大丈夫だ。そんな奴は相手にする価値もない」

ハルは言うとどこかに行ってしまう。

「……家族ってアタシにはいないからわからないけど、あんなに怒る程大事なものなの？」

シオンは誰にともなく不思議そうに聞く。

「……いない？」

アスカは言葉の意味を考えるようにシオンを振り返る。

「…アタシ、捨て子だったの。発見された時なんか死にかけてたらしいし、本当にいらなかったんだろうね」

「……え？」

シオンの発言はアリアクロスではあり得ないことだった。

周りの人間はざわつく。

子供を捨てる親などいるわけがない。

何があっても守るべき家族は唯一無二の存在だ。

だから家族の心配をしないシオンをハルは軽蔑したのだ。

「……で、でも、お兄ちゃんって言ってなかった？」

「うん。引き取られた先の変態親父がそう呼べって。よくもまあ、あんな変態のとこに行かされたもんだわ。大概気持ち悪い男だったのよ。手は出されなかったけど、お兄ちゃんは本物のロリコンだったんでしょうね。あ、でも、友達は沢山いたわよ？寄せ書きは皆が書いてくれたみたいだし…でも、考えても心配しても会いたくてももう誰も…あの変態のお兄ちゃんすらいないのよね」

そう言うシオンは酷く儚げに見えた。

四百年が経って、誰も知ってる人間はいない。

それを現実だと認めたのだ。

今の状況を理解し、誰よりも不安なのはシオン自身だ、知人達を心配してないわけがない。

それに気付いた周りの人間は申し訳ない気持ちになる。

「……ごめん。何か、私はあなたのことを誤解してたわ。後でハルはブッ飛ばしておくわ」

「…別にいいわよ。アイツは禿げればいい、ていうか禿げろ。そして後悔するがいいわ」

「……君は強いんだな」

カウスが眩しいものを見るように言う。

もし、自分が知らない場所に放り込まれたら彼女のようにいられるだろうか。

きっと無理だ。

現実だと認めることはできない。

「…まあ、一応、成人間近だし?図太い神経してるってよく言われるわよ」

シオンは答える。

「成人間近？」

「ええ、１９歳よ。あ、もう４２２歳になるのかしら？」

「……驚いた。もっと子供だと思っていたのだが」

衝撃を受けたようにレイスが口にする。

シオンはハル達と同じかそれより下に見える。

「…何？子供っぽいってこと？」

「…若く見えるってことですよ。お得ですね」

ルミエールが笑って言う。

「アタシは特売品か何かかってのよ」

「……取り合えず、医療班はこの娘の精密検査を、エミリアはカプセルの文字を解析、レイス博士はカプセルの解析を。パイロットと整備士はグレイドの整備。次の戦闘に備えろ。それと、シオン。君は我々の監視対象になる」

ゼルダは次々と指示を出していき、最後にシオンに宣告する。

「……真っ裸で？」

「……服は与える。…何故、君はそこまで裸にこだわる？」

呆れたようにゼルダは言う。

「ムッツリ艦長とセクハラ親父、腹黒鬼畜眼鏡ならやりかねないと思っていそうですよね。いっそ、そうします？」

笑いを堪えてルミエールは言う。

「……畜生め、か弱い女の子になんつーことを言うのよ。よってたかって最悪だわ。鬼畜の他に最低最悪の変態親父連盟の称号もつけてやるわ」

シオンは悪態をつきながら、段々と目蓋が閉じてくるのを感じる。

疲れた、とても眠い。

シオンは意識を失うようにカプセルの中に倒れ込んだ。

驚いたのは周りの人間だった。

今まで元気よく話をしていたのにシオンが急に倒れてしまったのだから。

「医療班、何をボーッとしているんだ。すぐに検査を」

ゼルダの指示に、医療班はすぐさま行動に移す。

シオンをカプセルの中から抱き上げて出すと担架に横たわらせすぐに医療室に向かっていった。

「…喋らなければ美少女なんですけどね」

運ばれるシオンを横目に見ながらルミエールは残念そうに言う。

「……そうだな」

ゼルダは答えながら、見たことのないグレイドを観察する。

「……この歌はあの子が歌ってるって本当ですかね?随分、印象が違いますけど」

流れている歌声は心地よく耳に入ってくる。

優しい歌声だった。

シオンは失敗作だと言っていたがまったくそんな気はしない。

「…この歌は興味深いと思うぞ。α派が出ている」

手元の計器を見ながらレイス博士が言う。

「……それにあの娘も中々興味深い。夢だと思う判断も早かったが現実だと認識してからの切り替えの早さも異常だ。これまでの生活環境の影響だろう。それと、あの思考はアリアクロスにはないものだな」

「……捨て子か。地球は美しい惑星だったと聞いたが、人の心は荒んでいたのか」

ゼルダは呟くように言う。

離婚はしているが、元妻のことも娘のことも大切に思っている。させてはくれないだろうが、できる限りのことはしたいと思っている。

特に娘は可愛くて仕方がない。

捨てることなど考えられない。

アリアクロスでは家族は心の支えである。

そう思うと、過酷な状況で育ったのであろうシオンが不憫でならない。

聞こえてくる歌声は優しいものだが、哀しい歌のような気もしてくるから不思議だ。

しんみりした雰囲気の中、グレイドからは歌が流れ続けていた。

## 閑話

「……地球の２１１８年は、消滅したした年だな」

レイスは様々な器具を用意しながら言う。

「…消滅前に完成されたが、マクシミリアン討伐には間に合わなかったグレイド…ということか」

ゼルダは呟く。

「……最古のグレイドってことですよね。でも、正直、我々の技術より進んでいるように思えます」

ルミエールもグレイドを見ながら言う。

一瞬でマクシミリアンを消し去ることなど、最新のグレイドを持つアリアクロスでも技術的に困難である。

見たことがない型をしているが機能性はかなり優れているように思える。

なにしろ三百年はこの状態なのだかろうから。

「…艦長と副官、暇なら荷物を取り出せ。あの娘の持ち物だ」

レイスがカプセル内から顔を出して、二人に言う。

「…腹黒鬼畜眼鏡は人使いが荒いですね。一応、私達は上司なんで

すよ？」

ルミエールは言いながら、レイス博士が出してくる荷物を受け取っていく。

「……しかし、確かに人を見る目はありそうだな」

ゼルダは小さく呟く。

「……それはつまり、僕が腹黒で鬼畜眼鏡だと？」

ニッコリと笑いレイスはゼルダを見る。

「……」

ゼルダは何も言えず、レイスから目を逸らす。

レイスのことは士官学校時代から知っている。

パイロットになる前から様々な実験と称した嫌がらせを受けた。

はた迷惑な同期生。

それがレイス博士だ。

体に染み付いたレイス博士への畏怖は今もある。

立場上は上司だが普段から彼には気を使っていた。

ルミエールも同じだった。

過去にレイスに報復を試みて、死ぬ思いをしたことは今や伝説となっている。

「……一瞬で本質を言い当てるんですから、大したものだと思いますよ」

ルミエールは苦笑し、荷物をゼルダに持たせる。

「……服か？」

ゼルダは渡された見たこともない布地を見ながら言う。

「…着物ですね。過去の日本ではよく着てた服らしいです」

機体の文字を書き写していたエミリアが艦長に言う。

「……動き辛そうだな」

「観察は後にしろ。ディスクが何枚かある。すべて調べろ」

レイスは言いながら、ディスクをまとめた箱をゼルダに渡す。

「……了解した」

「…どっちが上司だかわかりませんね？」

ルミエールが苦笑する。

「荷物は以上だ。僕はこれから、グレイドを調べる。誰も邪魔はす

るなよ」

それだけ言うと、レイスはカプセルの中を黙々と調べ始める。

「…では、私たちは所持品とそのディスクを調べましょうか」

ルミエールの言葉にゼルダは頷き格納庫を後にした。

「……ハルはどこに行ったのかしら？」

アスカはカウスに聞く。

「ブッ飛ばすのか？」

「……そうしたいけど、ハルの気持ちはわからないでもないわ」

アスカは神妙な顔をする。

ハルの家族はマクシミリアンとの戦闘に巻き込まれ亡くなった。

あの時の彼の落ち込み様は酷いものだった。

「…でも、アイツがイラついてたのはもっと別の理由だと思うけどな？」

カウスは言う。

「……？」

アスカは不思議そうにカウスを見る。

「……東城さんはすげぇ可愛いと思うんだけど、でも、ちょっと残念な感じがするだろ？」

カウスは頭を掻きながら、同意を求めるように言う。

「…要するに、見た目と中身のギャップにイラついたわけ？」

「平たく言えばな。アイツってけっこう、夢見るタイプだからさ」

カウスは苦笑する。

「……やっぱブッ飛ばしてもよさそうね。ハルの方が最低だわ」

アスカは指をポキポキと鳴らして言う。

「そうか？俺はハルの気持ちの方がわかるけどな」

カウスの言葉にアスカの鉄拳が彼の脇腹に飛ぶ。

「～～ってぇ。ブッ飛ばすのはハルじゃねえの？」

「…アンタも同罪よ」

格納庫にいるハルやカウスと同じことを思っていた男性陣は、その様子を見てアスカの鉄拳が飛ぶのを恐れ口を閉じるのだった。

「……しかし、すげぇよな。東城さんは。艦長や副官、博士にまであんな風に言えるなんてさ」

「…確かに、すごいわよね。思ってても私たちには口に出来ないものね」

「……アスカ、博士が」

「大丈夫よ。あの人、集中してる時は人の話なんか聞いてないんだから」

アスカの返事にカウスは顔をひきつらせアスカの後方を見る。

「……アスカ・エミル。中々いい度胸だ」

「……あはは」

アスカはその声に乾いた笑い声をあげて振り返る。

「…君たちにあのグレイドの操作性を見てもらいたいのだが?」

その言葉にアスカとカウスは目を輝かせる。

未知のグレイドは彼らにとっても興味の対象だった。

「鬼畜博士としては、アスカは遠慮してもらってもかまわんが?」

「……すみませんでした!そんな意地悪なこと言わないでください よ!」

アスカは必死に謝る。

「…これでは、鬼畜と言われても仕方がないか。……ハル・ジェイ

ドも連れてこい。それからだ」

レイスは小さくため息をつき二人に言うと、未確認グレイドの方に戻って行く。

二人は顔を見合せ、嬉しそうにハルを探しに格納庫から走り出していく。

「……若いわね」

「本当、羨ましいわ」

それを見ていたエミリアとアイが話をする。

「お前達も用が済んだなら出ていくがいい」

「……腹黒鬼畜眼鏡ってぴったりの表現だわ」

アイは横目でレイスを見ながら言うと格納庫を出ていく。

「……博士、ちゃんと謝った方がいいですよ？かなり根に持っていますよ」

エミリアはレイスに言う。

「…僕は悪くないと思うんだが」

「……それがわからないんだったら、当分許してもらえませんよ」

エミリアはため息をつき、メモした文字を確認する。

「……」

レイスは頭を掻いて、アイが出ていった扉を見つめる。

そんなレイスに呆れつつ、エミリアはメモを持って格納庫を出ていった。

「……わからないな」

ポツリと呟くと、レイスは作業を再開しはじめた。

## 閑話2（前書き）

読んでくださってありがとうございます。

# 閑話2

「ハルー！」

アスカとカウスは艦の居住区へ渡る通路で宇宙空間を見つめているハルを見つけると声をかける。

ハルはぼんやりとしていた。

「……ハル、東城さんのこと考えてたのか？」

カウスが声をかける。

「…誰があんな最悪なやつ」

――パシィィーン

ハルが言い終わる前に、アスカはハルの頬を手のひらで叩いた。

「な、何するんだよ！」

ハルは頬を押さえて、驚いたようにアスカを見る。

「アンタねぇ、あの子のこと何も知らないくせによく言えるわね！あの子は、誰かに会いたいって思っても誰にも会えないのよ？」

アスカの言葉にハルは下を向く。

「…ブッ飛ばすんじゃなかったのかよ？」

殴られた脇腹を擦りながらカウスはアスカに恨めしげに言う。

「アスカこそ、アイツのこと知ってるのかよ?」

ハルはムッとした様子でアスカに聞く。

「知らないわ。でも、あの子は最悪なんじゃないわ。勝手にあの子に幻想抱いて八つ当たりする方が最低よ」

アスカの言葉にハルは言葉を詰まらせる。

「……悪かったよ」

不貞腐れたようにハルは言う。

「私に謝ったって仕方ないわよ。アンタは禿げて後悔するがいいって言ってたわよ?」

「……アイツ、本当に黙ってればいいのに」

ハルはしみじみと言う。

「激しく同意するよ。東城さんは黙ってれば美少女だよな?……と、取り合えずさ、博士がグレイドの中を見せてくれるって言うから行こうぜ?」

カウスはアスカの殺気を感じ取ったのか、慌てて話を変えるように言う。

「え、ホントか？……あの中を見れるの？早く行こう！」

ハルは落ち込んでいたとは思えないほど目を輝かせ、格納庫に向かって走り出す。

二人はその様子に顔を見合せて笑うとハルの後を追って走り出す。

彼らはマクシミリアンと戦うグレイドに憧れパイロットになった。

目の前でマクシミリアンを消し去った未知のグレイドに興味を示すのは当たり前のことだった。

バタバタ走りながら、格納庫の扉を開け、三人が中に入ると整備士達と話しているレイスがいた。

すでに音楽は止まっていた。

「博士！ハルを連れてきました」

アスカがレイスに声をかける。

「……見ればわかる。さっそくだが、君たちにはこのグレイドは何に見える？」

レイスは三人に質問する。

三人はシオンの乗っていたグレイドを見ながら考える。

「……人型ですけど、動物のように見えます」

ハルが答える。

このグレイドはハルのアルテミス、アスカのゼウス、カウスのアテナのようなグレイドとはまったく違う型をしている。

彼らのグレイドのように人型ではあるのだが、趣が全く違うのだ。

「…羽根も生えてるし天使なんですかね？」

アスカは言いながら首を傾げる。

「何だかよく分からないけど、格好いいと思います」

カウスの言葉に二人は頷く。

「確かにアリアクロスの最新のグレイドよりも美しい造形だな」

レイスも同意する。

「……それに、カプセル内が広いですよね？」

アスカは言う。

普通は一人位しか乗れないが、このカプセルには三人くらい乗れそうだ。

「…ふむ、残念な報せがあるのだが」

レイスは三人を見る。

三人は息を飲んでレイスを見る。

「…君達に操作してもらおうかと思ったのだが、指紋と人物認識の為に不可能だ」

レイスは眉を下げて言う。

「操作できたのは、音楽ファイルとカプセルの開閉、グレイドの変型だけだった。新たに指紋と人物登録をすれば運転も出来そうだが今のところその方法がわからないのだよ」

「……運転できるのは東城さんだけってことですか？」

カウスが残念そうに質問する。

「……うむ、その可能性が高い。君達、中を見てみるがいい。面白いものが見れるぞ」

博士の言葉に三人は嬉しそうにカプセル内に入る。

操作は出来なくても、どのようになっているか構造はわかる。

「……何これ？」

アスカは中を見て驚く。

自分達の乗っているグレイドとはかなり違う。

「…バイクみたいだな」

ハルが言う。

運転席は跨がる仕様になり足元にはクラッチがありハンドルにはブレーキがついている。

「…ギターもあるぜ?」

ハルは上を見上げて言う。

運転席から手を伸ばせば、ギターを引き下ろすことができる。

ギターは見たこともない形をしており、いくつかボタンが付いていた。

「……こんなの操作できるの?」

アスカは驚きながらあちこちをみる。

「…でもさ、東城さんはずっと寝てたわけだろ?何で、変型したんだろう?」

カウスが不思議そうに言う。

「……オートシステムが作動したんじゃないか?考えてみろよ、三百年くらい宇宙をさ迷ってたわけだろ?マクシミリアンと遭遇したら勝手に戦うように設定されていたとかさ」

ハルは考えながら言う。

機体の損傷などはない。

「……ハル・ジェイド、中々いい推測だ。君の推測は合っている。メモリーが搭載されているのだが寝息と共に咆哮とマクシミリアンと思われる断末魔の叫びが何回もあった」

「……すごい技術者ってことですよね。オートシステムなんて、考えられない」

アスカは言う。

「そう、これの完成が早ければ地球は今も存続していただろうな」

レイスはカプセルの外からグレイドを眺めて言う。

「…博士はこの文字は読めるんですか？」

ハルはカプセルに書かれている文字を指差してレイスに聞く。

「……シオンの友人が書いたのだろうな。殆どが彼女の目覚めや幸福を願う文章だ」

レイスは肩を竦めて言う。

「……」

ハルはアスカに言われたことを思い出し下を向く。

シオンはこの文字を読んでいた。

友人たちのことを何とも思っていなかったわけがない。

「『君が目覚めて君の知っている人間がいなくても悲しまないで。俺たちは君の心の中にずっといるから。〈２１１８年に補修〉』彼女が見た文章はこれだろうな」

レイスは先ほどの一幕を思い出して言う。

「……名前は書いてないが、誰が書いたかを彼女は知っていたのだろうな。だから、あんな風に言ったのだろう」

レイスは言う。

「…本当に強いな、東城さんは」

カウスは言う。

自分に置き換えれば、号泣するか絶望に打ちのめされる。

それはアスカもハルも同じだ。

「…博士、音楽ファイルはどうやって操作するんですか？」

アスカは聞く。

何となく気分が落ち込むので雰囲気を変えようと思った。

「…座席の後ろの赤いボタンで曲を選び黄色のボタンで再生のようだ」

アスカは言われた通り赤いボタンを押してみる。

カプセル内のモニターにいくつか曲名が出ているようだが読めず、適当に選んで黄色のボタンを押した。

先ほどの曲とは違うロックが流れ始める。

「……さっきのと全然イメージが違う」

激しい歌声に驚きを隠せない。

「…でも、かっこいい曲だな」

ハルが呟くように言う。

彼女の歌声が心に染みてくる。

「……この歌もα波か」

三人が聞き惚れている中で、レイスは計器を持ち観測していた。

静かな曲ではなくロックのような激しい曲でα波が出ることが不思議でならなかった。

整備士たちの作業も音楽が流れているせいかはわからないが、効率もあがっているようだ。

録音されたディスクでこのような効果があるのだから、本人が歌えばどれほどの効果があるのだろうか。

レイスの研究対象にシオンの歌が追加された瞬間だった。

# 艦長と副官2（前書き）

読んでくださってありがとうございます。

「ダメだな」

「パスワードがわからない上に指紋と人物認証までついているなんてお手上げですね」

ゼルダとルミエールはディスクを並べて艦長室で話し合っていた。

「彼女が起きてから調べるしかない…か」

ゼルダはため息をつく。

「しかし、ディスクのすべてにロックがかかっているってすごいですね。何か重要な内容なんでしょうか？」

「さあな、それよりレイス博士の方はどうだろう」

ゼルダは言いながら、艦長室の備え付けの戸棚からコーヒー豆を取り出すとコーヒーを淹れ始める。

ルミエールはその様子に眉間にシワを寄せる。

普及したのはつい最近なのだが、ゼルダは普及する前から飲んでおり友人や艦の者に飲ませる時も彼自らが淹れて振る舞っていた。

「……あちらにも、ロックがかかっていそうですね」

「あのグレイドはマクシミリアンとの戦闘においてかなり有利にな

るだろう。どうあっても構造を解明しなければならない」

ゼルダは言いながら温めてあったカップの湯を捨ててコーヒーを注ぎ込むと、カップをルミエールの前に置く。

「……ありがとう」

ルミエールは無感動に礼を言い、コーヒーを一口飲んでカップを置く。

正直、ゼルダのコーヒーは苦手だった。

ゼルダのコーヒーは苦い。

砂糖やミルクを入れようものならコーヒーはそのままを楽しむものだと説教をし始める。

飲まなければ飲まないで不機嫌になるのだから手に負えない。

「まあ、あのグレイドがこれから何らかの利益をもたらしてくれるのならいいですけどね」

言いながらルミエールは他の所持品を見てみる。

コーヒーから意識を離したいルミエールは必死だった。

他には、着物とノート、後はクラシッシクギターだけだ。

ギターは大事そうにケースに入れられていた。

「ゼルダも地球の言葉は読めませんでしたっけ？」

ノートを見せて聞く。

「俺の読めるのは公用語と言われる英語だけだな」

ゼルダは肩を竦める。

ノートに書かれている文字は日本語でゼルダには読めない。

「ああ、地球は様々な言語が存在したのでしたね。同じ星なのに不思議なものですね。これはエミリアかレイス博士に任せますか？」

「そうだな。……冷めるぞ？」

ゼルダは答え、チラリとルミエールの前のカップに目をやる。

「……ぬるいほうが飲みやすいんです」

にこりと笑い、ルミエールは答える。

「…しかし、あのグレイドとお嬢さんはどうします？」

ルミエールはゼルダの意識をコーヒーから外すために話を続ける。

「……そんなにコーヒーが嫌いか？」

ゼルダのため息混じりの言葉にルミエールは舌打ちをする。

コーヒーが飲みたくないが為の会話だと気付かれている。

正確にはコーヒーは嫌いではないがゼルダの淹れるコーヒーが苦手なだけだ。

仕方なしにルミエールはコーヒーを飲み干す。

「……二杯目をいれよう」

「…いりませんよ。それより、アリアクロスにはどう報告するんです？」

心底嫌そうな顔で答えたルミエールは、真面目な顔に戻る。

「……いらないのか」

残念そうに言い、ゼルダは自分の前のコーヒーを飲む。

「先ずは、エターナル首長に報告しなければな」

「……ああ、私は同席はしませんからね？」

「俺一人ではシオンに何をされるかわからん」

「……いや、多分、シオンが何をするかわからないかと。やっぱり面白そうだから行こうかな」

ルミエールは言いながらほくそ笑む。

あの首長にシオンが何を言うか楽しみだ。

「……あまり睨まれるようなことを言われるとこちらが不利になると思うが？」

ゼルダは片眉を上げて言う。

「どうせ睨まれているんです。いっそ好き勝手喋らせて手に負えない娘だと思われた方が、彼女の自由は確保しやすい。そしたらこちらで預かることができる。あちら側に行かれてしまうと我々が守ることは難しいと思います」

ルミエールの言葉にゼルダは考える。

あちら側とはもちろんアリアクロスの政治家たちのことだ。

彼らは自分達の保身しか考えていないような連中だ。

純粋な地球人などと言ったら彼らの利権のために確実にシオンの自由はなくなることだろう。

ただでさえ慣れないであろう環境に制限された生活を送らなければならなくなるのは余りにも可哀想に思える。

「……まあ、私たちが彼女の今後を話し合ったところで彼女がどうするか、なんですけどね」

ルミエールはそう言うが、彼女の選べることなど殆どないだろうことはわかっていた。

かつての自分達がそうだったのだから。

「……最善を尽くすしかない」

ゼルダは言うと、コーヒーを口にする。

――――ビービー

艦内に警報が鳴り響いた。

『艦長、マクシミリアンがエターナルに急速接近中です』

緊急回線が開かれ、モニターにはマクシミリアンと思しき映像が写し出される。

「すぐにブリッジに戻る。パイロット達は定置につけと指示を」

ゼルダは通信に答えると、立ち上がり上着を着る。

『了解しました』

返事が聞こえ緊急回線は切れる。

「…行くぞ」

「はい、艦長」

二人は艦長室を後にし、ブリッジに戻っていく。

マクシミリアンの襲来は日に日に多くなっていた。

そのせいでエターナル市民は不安に陥り治安も悪化している。

母星からは最低限の人員しか送られてこず、エターナルは見捨てられているのだと噂まで流れ、エターナル首長からは軍と本星への嫌味を聞かされ続けて正直辟易していた。

とにかく負けるわけにはいかない、エターナル市民の命を守ることこそが彼らの使命であった。

# 戦闘

――ビービー

歌のリズムに乗りながら作業していた整備士たちの手が警報音に反応し止まる。

格納庫の中が慌ただしくなる。

「……マクシミリアンか。先輩たちがいないってのに最悪だな」

カウスがため息をつく。

「仕方がないだろ。先輩達は本星に戻っているんだから……今は三人だけだけどやるしかないさ」

ハルは気合いを入れるように両頬を軽く叩く。

「そうよ、協力すれば何とか撃退はできるでしょ！」

アスカも気合いを入れて言う。

何曲か歌を聴いていて自然と力が湧いてくるようだった。

「ハル、カウス、アスカ、無理はするな。……絶対に死ぬなよ」

カプセルから顔を出して、レイスが三人に言う。

「「「はい！」」」

三人はレイスや頷く整備士達に力強く返事をする。

『マクシミリアンがエターナルに向かっています。パイロット達は直ちに迎撃準備をし、定置についてください。間もなく警戒領域にマクシミリアンが到達します』

ブリッジからの指示に三人は各々のグレイドに乗り込む。

『マクシミリアンをエターナルには侵入させない、ヴリュンヒルデ小隊、出撃する』

『『了解』』

ハルの掛け声と共に三人の乗ったグレイドは宇宙へと飛び出していく。

「……大丈夫かな、あいつら。ミリアム隊長もいないし」

整備士の一人、トーイが心配そうに、三人の飛び出したハッチを見る。

「……大丈夫さ。ハルは首席で卒業したんだぞ？アスカやカウスだって優秀だし」

他の整備士、マリオンが答える。

「教習と実戦は違う。彼らはまだ未熟だ。ほんの少しの油断が命取りになる。状況判断、これぱかりは死なずに実戦を重ねるしかないのだ」

レイスが静かに言う。

「…あいつらは生き残ってくれますよね？」

トーイは小さく言う。

幾人ものパイロットを送り出し還ってこなかった者もいる。

「……ああ、そう願いたいな」

レイスは答える。

「ミリアム隊長達はいつ帰ってくるんですか？」

マリオンが聞く。

「……わからん。本星は、いや政治家達は艦長と副官をかなり邪魔に思っているからな。ミリアム達が戻りたいと思っても何かにつけて引き留めているんだろうな」

「……それは何でですか？」

「艦長と副官はあれで中々強気でな、彼らの軍の改革により甘い汁を吸ってた連中は処分され、政治家と軍の癒着を一掃した。それが気に入らなかったんだろうな、新たな将軍を据え置き、左遷してしまうんだからな。艦長と副官には最低限の人員しか与えず、自滅するのを待っているんだろうな」

「……政治家にとって、軍人やエターナル市民の命はどうでもいい

ってことですか？」

マリオンは言う。

「……彼らの大事なのは、自分達の命と利権だろう。本星が危機に陥れば、レジェンド艦を呼び戻すのだろうな」

「……最低っすね」

マリオンは言う。

「そしたらエターナルはどうなっちゃうんですか？」

トーイが心配そうに言う。

彼は生粋のエターナル生まれで故郷はエターナルだ。

「艦長と副官がエターナルを見捨てるとは思えん。首長は……まあ性格は陰湿だが、市民の安全が第一、軍の活躍を祈ってる一人と言えるからな」

「博士の叔父上でしたよね？」

マリオンが顔をひきつらせ言う。

「……ああ、嫌なことにな。あの男のせいで僕まで鬼畜やらなんやら性格を疑われてしまう」

レイスが真面目に言う。

「……」

二人は何も言わず苦笑する。

「とにかく、本星の政治家を黙らせるにはマクシミリアンに負けずに勝ち続けるしかないということだ」

レイスは言う。

「……俺たちにできることはグレイドを強くすることだけです」

マリオンは言う。

パイロット達の負担を少しでも軽減できるよう整備することが、今できる精一杯のことだ。

それしかできないことを歯痒く思う。

「このグレイドを解析できれば、圧倒的に戦闘は楽になるはずだ。お前たち技術者には頑張ってもらわなければならない」

レイスがカプセルの外に出てグレイドを見ながら言う。

彼なりの励ましのつもりなのだろう。

「「はい！」」

トーイとマリオンは返事をすると自分達の持ち場に戻る。

レイスはそんな彼らを見ながら、格納庫をあとにした。

## 戦闘2（前書き）

戦闘シーンは書くのが難しい。

# 戦闘2

「ハル、アスカ、カウス、定置に着いたか？」

『『『はい』』』

ブリッジからのゼルダの通信に三人は答える。

彼らのいる場所は人工都市のエターナルが遠目に確認できる。

「エターナルにマクシミリアンを近づけるな。エターナルの防衛システムを作動させるまで、なんとか堪えろ」

『『『了解』』』

彼らは答えると、マクシミリアンの襲来に備える。

「エターナルの自衛システム発動まで１８０秒」

「マクシミリアン、安全領域を突破……五体が限界領域に侵入しています」

「……誘導弾ミサイルの用意をしておけ、砲撃の準備もな」

ゼルダは言う。

「了解しました」

「……五体？」

ルミエールは考えるように呟く。
映像にはもっと多くいたような気がした。
『マクシミリアン確認、戦闘を開始します』
ハルは言うと、グレイドを変型させる。
アスカとカウスも変型させる。
『アスカとカウスはここを突破したマクシミリアンを撃墜してくれ』
『『了解』』
短い会話がなされ、ハルは装備しているランチャーを構えて撃つ。
――ブォォ
マクシミリアンの一体に当り、断末魔の叫びをあげながら落ちていく。
『よし！』
ハルは次々とマクシミリアンにランチャー砲を撃っていくが二体程当て損ねる。
――オォォ
当たった二体は怒り狂ったようにハルに向かって突進してくる。

『シールドシステム作動』

瞬間、ハルのグレイドは青い光に包まれ突進してきたマクシミリアンは見えない防壁にぶつかる。

『ソードシステム』

ハルのグレイドは更に変型し、グレイドの手の部分にはレーザーソードが握られている。

『うぉぉ！』

ハルは気合いを入れながら、剣を振る。

――――ブォォ

一体のマクシミリアンは真っ二つに裂けて落ちていく。

その勢いのまま、もう一体を切りつける。

――――オォォ

もう一体は間一髪の所で剣を避けたが致命傷には至らず、ハルを避けるように後退する。

「……流石は次代のエース。見事な腕ですね。艦長の若い頃を思い出します」

ルミエールが画面を見ながら感心したように言う。

「……私より優秀だ」

苦笑してゼルダは言う。

『アスカ、カウス、そっちは？』

ハルは通信しながら様子を窺う。

――――ブォォ

――――ブォォ

通信からマクシミリアンの断末魔の叫びが聞こえてきた。

最初に逃した二体はアスカとカウスが見事に撃墜したようだった。

『……あと一体』

ハルは呟くと、残りの一体を切りつけようとする。

しかし、マクシミリアンは勢いよく後退していく。

『……逃がすか！』

ハルはマクシミリアンを追う。

「いかん！ハル、戻ってこい！」

艦長席から立ち上がりゼルダは言う。

ゼルダの通信が聞こえていないのかハルはなおもマクシミリアンを追う。

「……アスカ、カウス、安全圏にマクシミリアンが数体残っています。ハルを連れ戻しなさい」

ルミエールがアスカとカウスに通信する。

『『了解しました』』

二人はハルの方に向かいスピードを上げて発進する。

『ハル！深追いするな！』

カウスが通信をする。

『やつらを倒さなきゃ、多くの犠牲が出る！』

ハルはカウスに答え、なおも追撃しようとしている。

『待ちなさいよ、そっちにまだマクシミリアンがいるのよ！』

『だったら全部倒してやる！』

ハルは聞く耳を持たず、どんどんマクシミリアンに近づく。

「……艦長、ハルの処分をちゃんと考えておきなさい」

ルミエールはチラリとゼルダを見て言う。

ゼルダは画面を見ながらため息をつく。

「誘導弾をハル・ジェイドに向けて射ちなさい」

ルミエールはオペレーターに指示を出す。

「え?でも、当たったら」

アイは驚いてルミエールを見る。

「当たりません。画面を見ていなさい」

ルミエールは答える。

「……は、はい」

アイは言いながらエミリアをチラリと見る。

「了解しました。誘導弾発射」

エミリアは言いながら手元のボタンを押す。

レジェンド艦から無数の誘導弾がハルのグレイド、アルテミスに向かって放たれる。

「砲撃の準備、左舷１２０。に」

ゼルダは指示をする。

「了解しました」

アイは答え手元の機器をを操作し始める。

「アスカ、カウス、ハルを頼む」

『『はい！』』

ゼルダの通信に二人は気を引き締めて答える。

『……うわ』

向かってきた誘導弾をハルは避けていく。

誘導弾は尚もハルを追いかけてくる。

ハルはグレイドを変型させ、マクシミリアンの後ろに回り込み、誘導弾をスレスレで避ける。

――――ブォォ

誘導弾はマクシミリアンに当り、マクシミリアンは断末魔の叫びをあげて落ちていった。

『……やった！』

『ハル、後ろ！』

アスカの声に反応し、彼が背後を見ると七体のマクシミリアンが迫っていた。

『ハル、避けろ！』

カウスの言葉にハルはさっと避ける。

誘導弾に紛れたカウスのランチャー砲がマクシミリアンに当たる。

――――ブォォ

誘導弾の残りも、音をたてながら次々にマクシミリアンに当たっていく。

辺りには煙幕が上がっていた。

『……しまっ！？』

煙に紛れ一体のマクシミリアンが近付いていることにハルは気付かなかった。

彼はマクシミリアンの強烈な一撃に吹っ飛ばされ、頭をコクピットに打ち付けてしまった。

意識を必死に保つ。

顔に生暖かい感触を感じ、血が出ていることに気づく。

少しずつ意識が遠退いていく。

『『ハル！？』』

二人は驚き、マクシミリアンを見る。

――ギ、ギ、ギ

かなりの大きさだ。

「エターナルの自衛システムが発動しました」

「アスカ、カウス、ハルを回収し直ちに帰艦しなさい」

ルミエールが声をかける。

『『…はい』』

二人の声が微かに震えている。

「落ち着きなさい。大型のマクシミリアンは動きは鈍い。大丈夫です。ハルは死んでいない」

ルミエールが冷静に言う。

二人は飛ばされたハルに向かう。

ルミエールの言った通り大型のマクシミリアンの動きは遅かった。

二人がハルのグレイドに着いた時はかなり離れていた。

『ハル、大丈夫か！』

『……う』

カウスのかけた声に呻き声が返ってくる。

激しく飛ばされたハルが生きていることにホッとする。

『ハル・ジェイドを回収。これよりレジェンドに帰艦します』

アスカが通信する。

――ギギギ

いつの間にか大型のマクシミリアンが三人のすぐ後方に近寄っていた。

『え、いつの間に？』

「カウス、ランチャーだ」

ゼルダの指示にカウスはランチャーをマクシミリアンに向けて放つが威嚇ぐらいにしかならない。

「アスカも出力を最大にしてランチャーを」

アスカも言われた通りランチャーの出力をあげ、マクシミリアンに向けて放つ。

カウスも出力を最大にしてランチャー砲を放つ。

――ギ、ギ、ギ

マクシミリアンを撃ち落とすことはできないが二人のランチャー砲

はマクシミリアンを押し返すように距離を拡げていく。

「今だ、撃て！」

ゼルダの合図にレジェンド艦から凄まじい砲撃が放たれる。

「カウス、アスカ、ハルを連れて離れろ！」

『『了解しました！』』

二人のグレイドはアルテミスを脇に抱えて素早く砲撃の範囲から避難する。

――ズドォォ

轟音と共に放たれた砲撃はマクシミリアンを断末魔の叫びもあげさせず消し去った。

『……終わったの？』

『……ああ、終わったな』

アスカとカウスはマクシミリアンが消え去った場所を呆然と見ながら会話をする。

「マクシミリアンを殲滅、残党も居ません。……我々の勝利です」

エミリアがホッとしたように戦闘の終了を宣言する。

「……お前たち、よくやった。さあ、帰ってこい」

ゼルダの声は厳しさがなくなり優しいものだった。

『『はい！』』

アスカとカウスは返事をし、ハルを抱えながら、仲間の待つレジェンド艦に戻っていった。

「医療班、格納庫に待機してください」

ルミエールが指示を出す。

ブリッジが再び慌ただしくなる。

「……ハルの処分は叱責と……副官の部屋掃除だな」

ゼルダがルミエールに言う。

「……まったく、貴方は甘過ぎです」

ルミエールは呆れたようにため息をつく。

「……そうか？私ならお前の部屋の掃除は地獄だがな」

クックッと笑いゼルダは言う。

「貴方の部屋が綺麗すぎるんですよ。私の部屋なんて普通です」

ルミエールがムッとして言う。

「……お前の結婚できない理由はそこだと思うがな」

「結婚しても離婚されるのは几帳面過ぎる部屋のせいでは？」

ルミエールの反撃にゼルダは頬をかく。

「…くだらない口喧嘩はその位にしておけ」

二人の元にレイスが呆れながらやってくる。

「未知のグレイドはシオンが起きてからでないと解析はできない。ディスクの解析は？」

「同じく、だ」

ゼルダが答える。

「……そうか。ならば、僕はこれから水膜を調べることにするか」

レイスは言うとさっさとブリッジを出ていった。

「……じゃあ、私は難民の照合でもしてきますかね」

ルミエールは言うとブリッジを出ていこうとする。

「……私も」

「艦長は首長の相手をしてくださいよ。今から緊急通信が入ってくるはずですから」

ルミエールが扉から顔だけ覗かせて言う。

その言葉にゼルダは大きくため息をつく。

「…未知のグレイドとシオンのことはまだ言わないでくださいよ？まあ、基本的に貴方が一方的に責められるだけだと思いますけど」

彼が言い終わり扉が閉まるのと同時に、首長からの緊急通信が入りゼルダは心底疲れた顔をする。

「……出来れば、無視をしたいのだが」

「…頑張ってください」

弱気な発言をする艦長にアイは笑顔で言いながら、緊急通信を開いていく。

「……」

ゼルダは無言で遠い目をするのだった。

エターナルの首長の嫌みは本当に疲れる。

レイスとルミエールが早々と通常業務に戻ったのは絶対に首長から連絡がくると踏んだからだ。

自分だけに面倒を押し付けた同期生たちに心の中で毒づいた。

回線が開いた瞬間に彼は軍人の顔に戻り、首長の相手をするために考えを纏めるのだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1587y/

宇宙〈そら〉のうた

2011年11月22日04時04分発行